

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

日時：平成 23 年 12 月 3 日（土曜日）15 時 30 分より 17 時 30 分まで

場所：東京外国語大学本郷サテライト 7 階会議室

報告者名（所属）：竹越孝（AA 研共同研究員、神戸市外国語大学）

報告タイトル：「活字本『老乞大諺解』における印出後の訂正について—奎章閣所蔵本を中心に—」

本報告では、朝鮮司訳院の漢学書『老乞大諺解』の活字本（1670 年印行）数種について、その訂正状況に対する検討を行った。ここで言う「訂正」とは、校了印出後に誤字があった場合に、その部分を切除して正字に直すことを指す。

現存する活字本『老乞大諺解』は、奎章閣所蔵本である奎 2044、2304、2347、1528 の 4 種の他、内賜本として慶北漆谷本（李敦柱氏旧蔵、未見）、Columbia University East Asian Library 蔵本（未見）、天理大学附属天理図書館蔵本などが知られている。このうち、奎 2044、2304、2347 の 3 種は廂庫本（昌徳宮の倉庫であった廂庫の旧蔵書）であり、奎 2044 が代表的テキストとして『奎章閣叢書』を始めとする各種影印の底本となってきた。しかし、方鍾鉉（1946）、安秉禧（1996）等によって、廂庫本の巻下は印出後の訂正が行われておらず、同じ奎章閣所蔵本でも奎 1528 のみは訂正が行われていることが指摘されている。本報告では、方鍾鉉（1946）において示された廂庫本と訂正本の異同状況を、現存諸本に突き合わせることによって得られた知見を述べた。

まず、訂正の方法に関しては、藤本（1994）の言う第一の方法（活字を押して/筆で書いてから紙を貼る）と第二の方法（紙を貼ってから活字を押す/筆で書く）のうち、第一の方法によったとしか解釈できない箇所はなく、現存諸本は活字の場合・筆の場合とも第二の方法によったと考えられる。

次に、訂正の状況に関しては、巻上については諸本がいずれも筆を用いて同内容の訂正を行っているので、同版と考えるとよいと思われるが、巻下については廂庫本と訂正本・天理本の間で活字が相違している丁が見られ、かつ訂正本・天理本が一貫して筆で訂正を行うのに対し、廂庫本は活字で訂正する丁と筆で訂正する丁があるなど、複雑な様相を呈している。巻下の各丁における活字の相違例と訂正のパターンは以下の通りである。

(1) 廂庫本と訂正本・天理本の間で活字の相違例がある丁

(1a) 活字の相違例のみ（訂正本・天理本の方が正しい）：第 4、5、6、7、8、12、13、24、25、28、29、30、34、35、36、47、56、57、59 丁

(1b) 廂庫本に訂正があり、結果は訂正本・天理本の活字と一致する：第 1、3、11、22、23、31、32、49 丁

- (1c) 廂庫本に訂正があり、結果は訂正本・天理本の活字と一致する；訂正本・天理本にも訂正があり、結果は廂庫本の活字と一致する：第 10、26、45、61 丁
- (1d) 廂庫本に訂正があり、結果は訂正本・天理本の活字と一致する；訂正本・天理本にも訂正があり、結果は廂庫本の活字と一致しない（訂正本・天理本の方が正しい）：第 44 丁
- (1e) 廂庫本に訂正があり、結果は訂正本・天理本の活字と一致する；訂正本・天理本にも訂正があり、結果は廂庫本の活字と一致するものとししないもの（訂正本・天理本の方が正しい）：第 43 丁
- (1f) 訂正本にのみ訂正があり、結果は廂庫本と一致し天理本と一致しない（廂庫本の方が正しい）：第 66 丁
- (2) 廂庫本と訂正本・天理本の間で活字の相違例がない丁
- (2a) 廂庫本に訂正があり、その結果は訂正本・天理本の活字と一致する：第 9、50、51、64 丁
- (2b) 廂庫本と訂正本・天理本で同じ個所に訂正があり、結果は一致する：第 16、37、40、41、46、65 丁
- (2c) 訂正本・天理本に訂正があり、その結果は廂庫本の活字と一致しない（訂正本・天理本の方が正しい）：第 21 丁

以上のうち、(1a-f) と (2a) の場合、廂庫本と訂正本・天理本は異版であり、(2b, c) の場合、廂庫本と訂正本・天理本は同版の可能性があるとと言える。異版の丁については、その成立過程を次のように解釈することができる。

- (1a) 訂正本・廂庫本では新たに版を組み直した。
- (1b) 廂庫本の訂正箇所が多いため、通常の訂正では処理しきれず、訂正本・天理本では新たに版を組み直した。
- (1c) 廂庫本の訂正箇所が多いため、訂正本・天理本では版を組み直したが、組み直した際に誤り（もしくは見づらい箇所）が生じたので、それを訂正した。
- (1d) 廂庫本の訂正箇所が多いため、訂正本・天理本では版を組み直したが、組み直した版で直していなかった誤りが見つかったので、それを訂正した。
- (1e) 廂庫本の訂正箇所が多いため、訂正本・天理本では版を組み直したが、組み直した際に誤り（もしくは見づらい箇所）が生じたので、それを訂正した。また、組み直した版で直していなかった誤りが見つかったので、それを訂正した。
- (1f) 訂正本・天理本で新たに版を組み直した際に誤りが生じたので、訂正本はそれを訂正した。
- (2a) 廂庫本の訂正箇所が多いため、訂正本・天理本では新たに版を組み直した。

さらに、筆を用いて訂正する丁と活字を用いて訂正する丁があることから窺える訂正と改版の進行過程については、①丁により訂正の方法が異なっていた場合と、②時期により訂正の方法が異なっていた場合が考えられる。①の場合は、

(ア) 廂庫本の巻下では活字により訂正を行うグループと筆により訂正を行うグループがあった。廂庫本の巻上、訂正本・天理本の巻上下は筆により訂正を行うグループのみ。

(イ) 訂正本・天理本は巻下において訂正すべき箇所が多い丁の版面を組み直した。

(ウ) 訂正本・天理本はさらに訂正すべき箇所があれば筆により訂正を行った。

という過程が想定され、また②の場合は、

(ア) 廂庫本は巻下について活字を用いて訂正を行った。

(イ) 訂正本・天理本は巻下において訂正すべき箇所が多い丁の版面を組み直した。

(ウ) 廂庫本・訂正本・天理本は巻上・下についてさらに訂正すべき箇所について筆を用いて訂正した。その際、廂庫本ですでに活字により訂正が行われていた丁には手を入れなかった。

という過程を想定することができる。

以上のように、巻下では廂庫本と訂正本・天理本の間で同版の丁と異版の丁が混在した状態にあるが、訂正本・天理本の方が相対的に良いテキストであるという点は揺るがないと思われる。

<参考文献>

安秉禧 (1996) 「老乞大와 그 諺解書の 異本」 서울大學校 『人文論叢』 35 : 1-20.

遠藤光暁 (2010) 「崔世珍『韻會玉篇』について」 『譯學と 譯學書』 1 : 87-112.

竹越孝 (2009) 「天理図書館蔵の内賜本『老乞大諺解』について一印出後の訂正状況を中心に」 『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』 41 : 379-404.

藤本幸夫 (1994) 「朝鮮本の訂正に就いて一『重修政和經史証類備用本草』を中心にして一」 『朝鮮文化研究』 1 : 93-136.

方鍾鉉 (1946) 「老乞大諺解의 廂庫本과 訂正本과의 比較」 『한글』 96 : 42-55 ; (1963) 『一 纂國語學論集』 340-359. 서울 : 民衆書館.